

巻頭言

魚上氷（うおこおりをいずる）

杏林大学保健学部リハビリテーション学科
言語聴覚療法専攻
石毛美代子

新型コロナウイルス（COVID-19）感染が国内で初めて確認された2020年1月から4年が経過した。昨年5月には感染法上の位置付けが5類に変更され、社会は平常を取り戻しつつある。現在は感染流行の第10波ともいわれるが、直近の感染者数（全国平均）は1医療機関当たり13.75人（2月5日～2月11日）と前週の16.15人から減少し、11週連続での増加傾向に歯止めがかかった格好である。折しもこの文章を書いているのは七十二候の魚上氷、寒さに凍った川や湖の水が溶け始め薄氷（うすらい）に魚影が見える頃である。コロナ禍後の世界が透けて見える今と重なる感がある。

パンデミックを収束へと導いた主な要因は感染症学、免疫学をはじめとする医学および保健学分野における研究と技術であるといつて差し支えないだろう。人類はこれまでも飢饉、病気、自然災害等生き延びてきたが、今回のパンデミックは人類の存亡が科学研究と科学技術に依存している現状を浮き彫りにした。科学研究なしに人類は生き残れない。

しかし、科学研究はいつも社会からの緊急要請に応じて行われるわけではない。むしろ研究者自身が発見した問題に対する興味や熱意をモチベーションとする方が一般的ではなかろうか。また、研究は基本的に利他的なものではあるが、研究者が得る満足や喜びもまた重要な要素である。哲学者ラッセルは「幸福論」において、仕事を通して幸福を得る要素として「技術の行使」と「建設性」を挙げている。「建設性」とは「モニュメントを作り上げること」であり、科学分野では論文を書くことを意味する。このモニュメントは芸術家や職人のそれとは異なり、普遍性と再現性があり、かつそれまでに蓄積されたモニュメントとの間に連続性がなければならない。それはあたかもその分野における従来の知識が書き込まれた地図の中の、まだ描かれていない白紙の部分埋めるような作業である。モニュメント（論文）を作り上げたら研究コミュニティの門番（編集者と査読者）の信用を得て公開（掲載）してもらわねばならない。出版後もその内容は延々と検証され続け、より大きなコミュニティにインパクトを与えることもあるが、後年新しい真実によって否定されることもある。このようなプロセスは決して誰にでも出来るものではなく、最初から出来るものでもない。ラッセルは知的活動を楽しむには能力とそのための訓練が必要であるとも述べている。

杏林医学会の主な会員は医学部、医学部付属病院および保健学部の教職員や大学院生である。最も身近な研究コミュニティである本会および本誌には訓練の場としての要素が多分に含まれている。したがって、本誌には研究を行う能力がまだ十分ではないと自ら思う人にこそ投稿していただきたい。もし投稿された論文が薄氷の下の魚影のごときのものであったなら、それをしかと見定めることが本誌の役割であると思う。